

talk! talk! talk! 俳優・海東 健さん



俳優

海東 健さん

デジタルカメラもすっかりポピュラーになった今、フィルム一眼レフカメラがまた静かなブームとなっている。

NHK朝の連続テレビ小説『ほんまもん』で俳優として一躍注目を浴びた海東健さんも、今年になって、マニュアルタイプの一眼レフカメラを愛用しはじめたひとり。自分らしい撮り方でカメラを楽しむ海東さんに、カメラのおもしろさ、そして俳優としての夢をうかがった。

プロフィール

かいとう・けん。1979年4月5日、東京都生まれ。2001年『2001年の男運』（フジテレビ系）の砂山健役で俳優デビュー。2001年10月からNHK朝の連続テレビ小説『ほんまもん』で松岡武司役（ヒロイン山中木葉の相手役）を好演。現在は『夢のカリフォルニア』（TBS系/6月まで）に出演中。7月からは新ドラマ『恋愛偏差値』（フジテレビ系、木曜22時より）に出演予定。『恋愛偏差値』は4話ごと完結のオムニバス形式で、海東さんは8月29日開始の「第3章～彼女の嫌いな彼女～」より出演。今年、北海道ではじめて乗馬を体験。「1時間くらい乗ったんですが、すごく楽しくって。これからうまくなって、思いきり馬を走らせてみたいですね」。7月からの新ドラマへの出演も決定。趣味はスポーツ（サーフィン、バスケットボール）とカメラ。愛用機種はニコンFM2（マニュアル一眼レフカメラ）。

『ほんまもん』撮影時に会ったカメラ こんなに好きになれるなんて意外！？

海東さんは、最近カメラに凝っていらっしゃるとうかがいました。いつ、どんなきっかけでカメラを始められたのですか？

NHK朝の連続テレビ小説『ほんまもん』の撮影中に、カメラマンの人と仲良くなって、自分でも撮ってみたいなと思ったんです。そこでその人に相談してみたら、「最初はこういうカメラがいいんじゃないかな」と新品同様のカメラを安く譲ってくださったんですよ。それがFM2です。今年に入ってからは使いはじめたばかりなので、まだまだこれからなんですけど.....。

マニュアルタイプの一眼レフは、始めたばかりのころはなかなか難しいですよな。

ええ。絞りやシャッタースピードなど基礎的なことは、まず最初に一通り教えてもらいました。でも最初も今も、あまり技術的なことは気にせずに、撮りたいものを撮っています。自己満足の世界ですね（笑）。

最初のうちはいろんな失敗をしてみましたがちですよな。現像してみたら写真が真っ白に飛んでいたり、真っ黒になっていたり.....。

まあ、よくありますね（笑）。それでもカメラを楽しんでいる自分は、我ながら意外な感じですよ。

意外という？

僕ももともとスポーツが趣味で、体を動かすことが好きなんです。スポーツって、勝ったとか負けたとか、成功したとか失敗したとか、その場ですぐに結果が出るでしょう。でもカメラは、結果が出るまで時間がかかりますよね。構図を決めて撮って、現像して、それでやっと写真が見られるという。今までの自分にはなかった趣味です（笑）。現像から戻った写真の入った袋を開けると、どんな写真が撮れているかなとドキドキしてしまうんですよ。



「シャッターを切ったときの感触と音が好き」 撮っている実感は一眼レフカメラならではのもの

海東さんにとって、一眼レフカメラのおもしろさはどんなところにありますか？

シャッターを切ったときに手に残る、感触や音ですね。最初のうちはそれだけでおもしろくて、感触を楽しむために、24枚を撮り切っていました（笑）。この感触を知ってしまうと、レンズ付きフィルムのシャッターは、もう寂しい感じがしてダメですね。

くせになる感触ですよな（笑）。デジタルカメラは使われないのですか？

いちおう持ってはいますが、あまり今は使ってないです。やっぱりマニュアルタイプの一眼レフカメラには、「撮っている！」という実感があると思います。あとは、手にずしっとくるカメラの重さも好きですね。僕自身、わりとアナログな人間なんです。今の時代はデジタルかもしれないけれど、俺はフィルムだ！みたいな（笑）。



海東さんのFM2についているのは50mmの単焦点レンズ。今はこれ1本で撮っているそう。

熊野の森で深呼吸してリフレッシュ 「その場の雰囲気を残した写真が撮りたいです」

今日は、今までに撮った写真を何枚かお持ちくださいました。

はい。この写真はカメラを始めただばかりのころ、和歌山県の熊野の森を撮ったものなんです。熊野には、『ほんまもん』の撮影で大阪から数回行きました。おかげさな言い方もしれませんが、大阪という都市から熊野に行くと、体が新鮮になった感じがしましたね。杉やひのきの匂いが、体のなかをリフレッシュしてくれるというか.....。そんな風景を写真に残したくて撮ってみました。

思い出深い写真ですね。『ほんまもん』で海東さん演じる松岡さんは、サラリーマンを辞めて、自然公園の動植物を守る自然保護官（レンジャー）になるという役どころでした。素顔の海東さんも、自然がお好きなんですか？

好きですね。熊野は、原生林があったり、温泉が湧き出ていたり、本当にすてきな場所です。もっといっぱい撮っておけばよかったですね。仕事の合間にとったので、あまり数がないんです。



海東さん撮影の熊野の森。「森の中になると、本当に気分が落ち着きます」と海東さん。



家族連れが遊ぶ霧団気にひかれてスナップ。東京の川べりにて。



お父さんめがけて投球！ のびのびしたお休みの1日。

東京に戻ってからは、お休みのときに写真を撮ることが多いとか。

ええ。東京でもやはり、自然のなかで人がのびのび楽しんでいる風景を見ると、シャッターを押したくなります。川べりに遊びにいったときに、水辺で遊んでいる親子がいて、その光景をスナップしました。親子連れは他にもいたのですが、この雰囲気にかれるところがありまして。この写真は都内の公園で撮ったものですが、キャッチボールをする親子ですね。子どもがお父さんめがけてボールを投げるときを、狙って撮ってみました。

この写真は、ずいぶん下の位置から撮っていますね。

芝生に寝そべっているカップルを見て、ほのぼのしていいなあと思いました。そこで、彼らの視点と同じくらいの高さから撮ったらどんなふうに見えるかなと思って、試してみたんですけど。

なるほど。このふたりが見ている世界も、ちょうどこの写真の構図と同じようになるはずですね。

いろいろ工夫して楽しんでいらっしゃいますね。



アングルを意識して撮った、遊び心のある1枚。

「日常の中にある、人間らしい温かみを撮りたい」シャッターチャンスは1時間待ちつづけたことも

この写真も都内の自然公園に行ったときのものです。ちょうど夕暮れになりかける時間で、ブレちゃっていますが.....

実は、この場所では撮りたいシーンがあったんですよ。川に小さな橋がかけてあるので、そこをカップルがわたっているところを撮りたかったんです。でも、いざ狙ってみると、ぜんぜんタイミングが合わないんですよ。誰も橋をわたってくれなかったり、誰かが橋をわたっていても、手前に余分な人がいたりして。1時間くらい待ちましたんですが、まったくダメでした。こうなったら、誰かにモデルを頼んでしまおうかとも思いましたよ（笑）。

親子、カップルが絵の中に入っている写真が多いですね。とくにカップルにこだわりがある気がします（笑）。

人と人の結びつきに、なんか心が動かされる場所があるんだと思います。好きな写真や映画でも、そういう人間どうしのつながりを描いたものが多いんですよ。人物を撮るというより、その周囲にただよう雰囲気やシャッターが押しなくなるんだと思います。あんまり寄って撮るとわざとらしい感じになるような気がして.....。その場の雰囲気を生かした感じの一コマが撮りたいなと思うんです。

これから撮っていききたい写真のテーマはありますか？

日常のなかにある、ちょっとした温かみとか、人間ばいところが撮れたらいいですね。また、写真を撮りはじめてから写真集をよく見るようになりまして、外国で写真を撮ってみたいなとも思います。最近印象的だったのは、モンゴルをスナップした写真集です。それは何か特別な風景を撮ったものではなく、モンゴルの人々の日常的な光景を撮っているものだったのですが、僕もそんな写真を撮ってみたいです。



川にかかる橋。「ここを誰かが渡ってくれば...」と海東さん。

子どものころからの夢かない俳優に きっかけとなった映画は『ゴッドファーザー』

俳優の仕事がお忙しいから、休日にゆっくり楽しめるカメラは、ピッタリなご趣味ですね。俳優としてデビューされたのは2年前のことですが、海東さんが俳優を志されたのはいつごろですか？

映画好きの両親の影響で、小さなころからよく映画を観ていたので、「俳優になれたらいいな」という憧れは昔からありました。それが明確になったのは高校生のころですね。レンタルビデオでいろんな映画やドラマを自分の趣味で観るようになって、そのときから俳優になりたいと具体的に考えはじめました。

きっかけになった映画はありましたか？

アル・パチーノ、ロバート・デ・ニーロ等が出演する『ゴッドファーザー』（※1）です。

『ゴッドファーザー』も家族のつながりを描いた物語ですね。

ええ。とにかく、アル・パチーノやロバート・デ・ニーロが男らしくてカッコよくて憧れました。またロバート・デ・ニーロには、『レイジング・ブル』（※2）というボクシングの映画でも感銘を受けました。俳優には、いくらでも違う人間になれるという魅力がありますよね。

※ 1：『ゴッドファーザー』...フランシス・F・コッポラ監督。『ゴッドファーザー』（1972年）・『ゴッドファーザーPARTII』（1974年）・『ゴッドファーザーPARTIII』（1990年）の3部で完結する。イタリヤ・シシリー生まれのマフィアのドン・コルリオーネをマロン・ブランドが、その後を継ぐ三



ご自分の写真を紹介するときは、はにかみながら答えてくださった海東さん。楽しみながら撮影している様子が伝わってくる。

男のマイケル・コルリオーネをアル・パチーノが、若き日のドン・コルリオーネをロバート・デ・ニーロが演ずる。マフィアの抗争とファミリーの結束を重厚に描写した、70年代を代表する大作。

※ 2：『レイジング・ブル』...マーティン・スコセッシ監督。1980年・アメリカ。主演のロバート・デ・ニーロが演じるのは実在のミドル級ボクサー、ジェイク・ラモッタ。彼はこの映画のために、体重を25キロ増やしてまで役に挑んだ。

映画を観て役づくりの参考に めざしているのは「心に残る演技」

海東さんご自身も『ほんまもん』では「松岡武司」。現在（2002年6月）放映中の『夢のカリフォルニア』では「竹内春樹」という、まったく違ったタイプの役を演じていますよね。

松岡は度量の大きい男で、木葉と支え合って夢を実現しようとする理想的なパートナーです。自分と比較してみると、あそこまでできないな、と思うくらいに心が広い（笑）。一方の竹内は、冷静でクールで自信家、人生は勝つことに意義があると思っている男です。だから演じてすごく新鮮で、楽しいですね。

竹内さん役に取り組む上で難しいところはなんですか？

竹内がもっている、自分に足りない部分をどうやったら補えるかを考えました。たとえば、竹内にはすごく合理的なところがあるんですが、それは僕があまりもっていない部分なんです。

合理的というとは？

竹内にとって大切なのは仕事で勝つこと、いいマンションに住むこと。そのためには余分なものには必要ない、つまり友達なんかいない、恋人はキレイでさえあれば自慢できる、みたいな（笑）。そこで役柄の理解を深めるために、参考になりそうな映画を探して観たりします。竹内役研究のためには、『ウォール街』（※3）という80年代のアメリカ証券取引を題材にした映画などを参考にしました。あとは人間観察というか、いろんな人を見ることで、演技に役立てられたらと思います。

演じていて、竹内さんに共感を覚えるところがありますか？

仕事に対する意気込みには共感しますね。竹内の場合は、勝つということに意義をおいている点が僕とは違いますが、男としてその情熱は同じです。竹内自身も、ドラマが進行するなかで次第に変化しています。それが竹内の成長なんだと思います。

これからやってみたい役はありますか？

今の自分のイメージからかけはなれたキャラクター、たとえばコミカルな役などにも挑戦してみたいですね。映画・舞台も、もちろんやっていきたいです。でも、テレビであれ舞台であれ、人の心に残るような演技をしたいといつも思っています。写真でも、忘れられない写真というのがあってほしい。僕もそんな演技をしたいです。

7月からの新しいドラマのスタートが楽しみです。もちろん、ご趣味の写真も、どんどん楽しんでください。

※ 3：ウォール街...オリバー・ストーン監督。1987年・アメリカ。80年代後半のアメリカ・ウォール街を舞台に繰り広げられるマネーゲームを描いた作品。出世に燃える若き証券マン、バッド・フォックスをチャーリー・シーンが演じる。



海東さんお気に入りの道。よく知っている場所も写真に撮ると新鮮。



海東さんの趣味はサーフィン。お休みの日は友だちと連れ立って海へ。FM2を持っていくこともあるそう。



[> コンテンツトップへ戻る](#)

※掲載している情報は、コンテンツ公開当時のものです。

株式会社 **ニコン** 映像事業部

株式会社 **ニコン** イメージング ジャパン

© 2019 Nikon Corporation / Nikon Imaging Japan Inc.